

動脈管開存症(PDA)とは

先天性心疾患の中でも多く見られる疾患です。

お腹の中の胎児のときには肺呼吸をしないため、血液が肺を通る必要がさほどありません。肺動脈と大動脈を繋ぐ『動脈管』が存在し、酸素をバイパスして運んでいます。出生後は動脈管が不要になるため、1〜2日で閉鎖することが一般的です。それが閉鎖せずに残ってしまうことを動脈管開存症と言います。

特徴的な連続性の心雑音があり、健診時に気づかれることが多いです。

残念ながら、1歳を迎えることなく亡くなることが多い疾患です。

《症状・進行の仕方》

● 初期

無症状である事が多く、元気に過ごせます。
動脈管内は血压の差の関係で左右短絡（大動脈→肺動脈への血流）です。

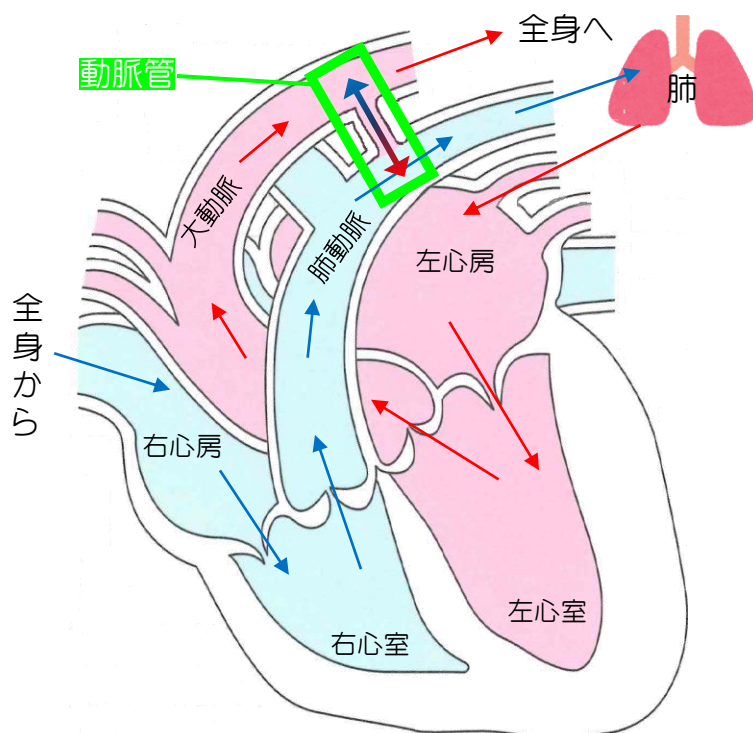
● 中期

左心房の容量がいっぱいとなり左心不全や肺高血圧症を来します。

- ・咳
- ・肺水腫
- ・疲れやすい、遊びたがらない
- ・腹水や胸水の貯留 等

● 末期

肺動脈内の血圧が高くなり、血流が逆転します。（右左短絡）
静脈血が全身を巡り、重度の酸欠状態となってしまう。慢性的なチアノーゼが見られます。



→ 動脈血(酸素を多く含む血液)

→ 静脈血(酸素に乏しい血液)

《治療》

◆ 内科治療

左心不全や肺高血圧症に対しての治療を行います。強心剤や利尿剤、血管拡張剤等を使用します。
しかしながら根本治療にはならず、外科手術を行うまでの間、心臓の負担を減らす目的で選択されます。

◆ 外科手術

肋骨の間を切開して開胸し、動脈管を専用の紐で結紮することで物理的に閉鎖させる手術を行います。
全身麻酔に耐久出来る成長段階と、病状を鑑みて慎重に手術時期を検討します。
既に病状が進行しており、末期状態にある場合は手術は不適応とされています。

術後1か月程度、異物反応と思われる咳が見られることがありますが、いずれ良化します。
しかし、手術後稀に閉鎖箇所が再疎通してしまうことがあります。

動いている心臓とそれに付随する血管が相手のため、手術自体の難易度も高いうえ、小さく、心疾患を持つ子への全身麻酔となるため、リスクは少なくありません。

しかし、無事に成功すれば普通の子と同じように生活し、天寿を全うできます。